

[49] ボリショイ・バレエ考

～老舗再生の術～

1999年10月22日 東京新聞 夕刊

あまりバレエに関心のない人でも、ボリショイ・バレエの名前は聞いたことがあるのではないだろうか。二十世紀を通じて世界のバレエのトップをもって任じてきた名門である。特に六〇年代後半、グリゴロヴィチが芸術監督になってからは、『スパルタクス』など躍動的な男性舞踊を特色とする作品によって、そのテクニクとスタイルには他の追随を許さないものがあった。

しかしここ十年間はその屋台骨も傾いたかと思われていた。グリゴロヴィチの創造力も年齢とともに衰えを見せてきたが、にもかかわらずバレエ団の独裁者としての権力は強まる一方のようだった。ロシア・バレエそのものが、すでに過去のものだという意見もあった。そこへもってきてダンサーの職業的な条件も明確ではない。そもそも当時のロシアには、定年とか契約とかいう発想自体が根づいていなかったらしい。

一九九五年にワシリーエフが劇場総監督に就任したとき、すぐさま導入したのがアーティストの契約制度だった。しかしそれで事態がどこまで改善されるか、大方の意見は懐疑的だった。世界的に有名だからといって、ダンサーに劇場改革を期待するのは無理だという声も聞かれた。

ワシリーエフの総監督就任のとき私はモスクワにいたが、ダンサーたちの表情に漂っていた不明

[49] ボリショイ・バレエ考

～老舗再生の術～

1999年10月22日 東京新聞 夕刊

瞭な陰ろいは今でも忘れることができない。ボリショイ・バレエの力を信じていると異口同音に言っているが、しかしその将来について具体的なヴィジョンを語る者は一人もいなかった。ソ連の解体という歴史的大変動の直後のことで、バレエだけでなくロシアの社会全体が深い混迷に包まれていた時期でもあった。

そのときから数えて今年ボリショイ・バレエは三度目の来日を果たしたことになる。それにしても今回は何という明るい舞台であったことだろうか。衰退の一途をたどるだけかと思われた老舗が新たな輝きに満ちていた。その甦りの理由はどこにあるのだろうか。

まず印象的だったのは技術面での充実である。バレエの水準は技術的な内容であらましが決定する。そしてそれは日々の丹精による以外なものなのである。レストランが味を落とさない、それと同じことだ。

もう一つの活性策としては、得意のレパトリーを改訂して衣替えしたことがあげられよう。ガラ・コンサート、『ドン・キホーテ』、『ジゼル』の三つのプログラムのうち、最も見応えがあったのはワシリエフの新演出による『ジゼル』だったが、ジバンシーのデザインですっきりと美術を改め、演技の細かい部分にも神経を行き届かせて、

[49] ボリショイ・バレエ考

～老舗再生の術～

1999年10月22日 東京新聞 夕刊

見違えるほど生き生きした舞台になった。十九世紀ロマンティック・バレエの傑作だが、いつのまにか古めかしくなっていたことも事実である。

従来のレストランを棚渡えしてガラ・コンサートのプログラムに載せたのも、ポリショイの興行きを感じさせるのに役立った。グリゴロヴィチの作品は葬り去られるのかと思いきや、『スパルタクス』や『愛の伝説』の一場面で懐かしい昔を思い出した。財産はお蔵入りさせず日々磨いて使わねば。

スターたちもそれぞれに成長して頼もしくなったが、なかでルンキナという新人が大いに前景を占めた。これは昔から大バレエ団が必ず用いる手で、とかく新製品は買ってみたい、使ってみたいのが人情である。新しい未来を育てることは、ジャンルを問わず芸術にとって最重要の課題だ。

欲を言えば、まっさらの新作が一つでもあったら、老舗バレエ団としては文句のつけようのない大盛況ということになったはずだ。

たかがバレエ。とはいってももの、老舗を再生させる術は人間社会の活動すべてに共通のものを含んではいないだろうか。何かと参考になること多いポリショイ・バレエの来日だった。